西洋雜記

四

り伊9
3815
1 上

京都帝国大学附属図書館蔵書印

門 リ伊9
3815
巻 4 止

西洋雑記巻四

目録

印度小鳥の説
南亜墨利加の大鳥の説
地生羊の説
海牛の説
アヂムナイム獣の説
亜墨利加の異猿の説
ドトアルス鳥の説
白孔雀白雑白猪白熊の説

印度の異木の説
鐵島水樹の説
太懶毒辣の説
アダムス。アツフルの説
象并象牙の説
オポツシユム獸并セミヒユルバ獸の説
亜弗利加の大獸の説
アソウハ獸の説
大蟹の説
水蛇の説并水蛇石の説

雞石の説
西洋言語の説
硝子を柔よする法
屋室并拐蕓の説
西洋府癘の説
西洋産婆の説
謔談
藥を服せびしてよく飲食をすゝむる方
薔薇をして香竄ちらしむる法
卵中よ文字を書するの法

石上ニ文字をなす法
金の量を重くする法
猩ニ絨を染むる小蟲の説
ゴウテ。ヒッスの説
則意蘭(セイラン)島の異草の説
工鄂(コンガー)國の奇鳥の説

西洋雜記巻四

印度小鳥の説

印度の地ニ一種の小鳥を産ル。ヒトヒを「キュアインムビ」と名ク。波尔杜尾尔(ポルトガル)國人ハよんで「ペカフロル」ト云フ。其羽毛甚美麗ニシテ。全體の大さ。僅ニ蝗(イナゴ)のごとく。頭の大ルさハ櫻子のごとし。喙ハ黑クシテ長く尖(トガ)リ。直(スグ)ニ其細キ線の如シ。足ハ全體ニ比スレバ甚小ニシテ。色黑く。尾モ長く直ニシテ。僅ニ三四羽あり。此小鳥の羽毛甚滑澤光彩ありて。日ニ映する時ハ。其美麗なること。まこと常ニ

倍に印度の人此島を佛像の前に蓄ひ〻是に餌を諸花を以てに相傳ふ性きもめて花を好て其地方花少る紅の候に至ればゝ喙を以て樹幹を穿ちて孔を作り其中に入て隱れ蟄して動ずること半年餘花盛なるの候を待ち〻すなわち出づといふ

南亜墨利加の大鳥の説

南亜墨利加洲孛露等の國一種の奇異なる大鳥ありて産に名き〻「コンドル」といふ此鳥の身軀きもめ〻大にして能羊羔を攫み〻高飛に其翅を開く時は一方の翅端より一方の翅端まで長さ凡五「エルレン」及一「エルレ

ン」四分の三よりゝる者あり一「エルレン」は此方の曲尺二寸四分餘の事なり五「エルレン」四分の三にて大抵此方の一丈二三尺に當る歟其足に爪なし故に足を以て人物に害をなすことあるこなし然れども喙は甚尖利にして能く牛皮を透す一つて一牛を此島二隻空より飛下り左右より牛皮を刺透して殺せることあり又小児を刺殺して攫み去りしことあり此島其羽は黑白斑文をなして美なり頭に冠あり黯赭色をなして前に垂れ形は頗吐綬雞に類して其色赤し孛露等の人神を祭ることあるは此島の羽を供して福を祈るとい

地生羊の説

韃靼（タルタリア）部中「サノタ」等の地ハ一種の奇物を産ハ（つき）を「ラテン」語ハ「アグニュス。シケイチキュム」（「ラテン」語「アクニュス」ハ古の北方の國の名漢ハ是ハ的亜と譯するこの土産なり「シケイチ」ハ生類を云）又「タッタリセ。ラム」（「ラム」ハ韃靼羊の義）又「シケイチセ。ラム」（是亜羊の義）といふ。韃靼の人ハ名付て「ボラメ井ス」といふ。是その地の土人一種の西瓜ハ似て西瓜より少（スコシ）短き種子を蒔（マ）けバ。すなわち一の草莖（クキ）を生じ。其莖高きこと三尺許ハいるをバ。一の羊の如くなる形のもの。其莖ハ纏（マト）ひ生じて。其臍（ホゾ）ハ

莖と相連り。其頭ハよび手足等皆具（ソナ）へ。又其頭の角を生ずべきの所ハ。一束（ソク）の毛叢（ソウ）生じて。甚高くあるこうも角を備へるハ似たり。其物熟するハ後ひて。莖ハ次第ハ枯槁して。身ハ皮毛を生ず。内ハ薄（ウス）き白膜（アク）あり。其毛柔（ヤハラカ）にして。卷曲（ケキク）愛すべく。其近傍四面ハ生ずるこうの他の諸草ハ日を追ておとろ（シボ）く萎ミ腐（クサ）つけ。此羊の食らへるハ似たり。いうんとなるバ人ハ一其近傍の草を刈（カ）るときハ。此羊すなわち枯るゝがゆゑなり。是ときるとき赤き液（エキ）汁あり。出づあること血の如し。其内の肉ハ。其味蝦（エビ）或蟹（カニ）の肉の如く。且甚甘美なり。韃靼の人ハ

の羊の皮を採り中とりて頭を包ミ其他衣服器用玩好の物となす。まさしく此羊熟するのころかゝるも狼らの獸来りて是を啖ものを欲す故に土人心を用ゐて諸の野獸を防ぐて甚密なりといへ然して其皮を歐羅巴洲中へまく輸するものハ賈物なりとて先哲すでに多く是を明白にせり。いうんとるゐバ皆東方印度の邊より生ずるところの大羊の胎内に有る羔の皮を剝き取りて偽造するものなれどなり其草莖に生ずるところの羊皮の真物の如きハ歐羅巴洲においてハ是を見ること稀なり。

右ハ「ドゝ子ウス」が本草および「ウヲイフ」が醫學寶函に載するところの説にして其言ふところ本草綱目に いへる地生羊と大抵相同し故に今下に本草綱目および史記の註に載するところの説を錄して以て考證に資ふ。

本草綱目羊部附錄に曰地生羊出西域劉郁出使西域記以羊臍種于土中溉以水聞雷而生臍二與地連及長驚以木聲臍乃斷便能行齧草至秋可食臍内復有種名壠種羊段公路北户錄云大秦國有地生羊其羔生土中國人築墻圍之有臍與地連割

之則死。但走馬擊鼓以駭之。驚鳴臍絶。便逐水草。吳莱淵頴集云。西域地生羊。以脛骨種土中。聞雷聲則子從骨中生。走馬驚之則臍脫也。其皮可為褥。一云。漢北人種羊角而生。大如兎。而肥美。三說稍異。未知果種何物也。當以劉說為是。然亦神矣。造化之妙微哉

まゝ史記大宛傳の註ハ宋齊が異物志を引ゝ曰。大秦之北。附庸小邑有羊。羔自然生於土中。候其欲萌。築墻繞之。恐獸來食。其臍與地連。割絶則死。擊物驚之。乃驚鳴臍遂絶。則逐水草為群。と見えゝり。

海牛の說

亜墨利加の海中ニ一種の獸を産ス。名けゝ「マナチ」とゝふ。和蘭の人ハ「ゼエグウ」とゝふ。海牛と云ふる義なり。是すなはち一種の身體不具の獸なり。其前の二足ハ手を用ゐるのゝ類。頗手ニ類す。全身赭色。其頭顱ハ野羊ニ似て。口を犢牛ニ類ス。眼小ニ。鼻孔大ニして。耳なし。尾ハ短くして圓し。體の大さ牛の如し。それ大なるものハ長さ一丈五六尺。徑七八尺ニ至るものあり。恒ニ海中ニ生ずるところの草を食ふ。其頭中ニ石あり。色白くして鈍圓。其形象骨ニ類ス。香氣およびあぶらあり。主治もつぱら痛を止るニ用ゐ。腎

および腰痛拘攣癩疝癥瘕等に用ゐて効あり。また外傅の藥にも用ゐるといふ。

「アヂムナイム」獸の説

亜弗利加洲中、利未亜・奴未弟亜等の地にあり。其人多く「アヂムナイム」といへる獸を畜ふ。其大さは犢牛の如く、形は羊に似たり。耳なゞく、うしろに垂る。毛短くして甚柔に、乳汁甚多し。身に力あり。よく人を負て行くに足る。此獸他に異なるものは、牝なるもの〻角ありて、牡には角なしといふ。

亜墨利加の異猿の説

南亜墨利加洲伯西児「マラグナン」等の地に、一種の猿を産す。名付て「カヨウ」といふ。全身毛甚多く、灰白色の長き髭あり。眼黒く耳禿に、尾は甚長く、その面貌あたかも老人に肖たりといふ。

「ドトアールス」鳥の説

印度亜の属島「マウリシウス」の地に、一種の大鳥を産す。名付て「ドト」といふ。「ドトアールス」といふ。ゆゑに「ストロイス。ホーゴル」駝鳥の種類なり。或いは天鵞の種とす。その頭に膜皮あり。是を掩ふと「モンニキ」僧官の名の戴くところの巾に似たり。故にまた號して「モンニキ。スワーン」と

いふ。「スワーン」天竺方にハ其形状すべく駝鳥に似てまゝ吐綬雞に類す。此鳥肉甚多くして一隻の肉をもつて。よく百餘人の食に供するに足る。其味もまゝ甚美なり。

白孔雀白雞白猪白熊の説

北方海寒の諸地方。殊に欧羅巴洲諾尓勿入亜國の地に。おゝく一種の白孔雀を産し。羽毛きわめて奇麗に。其雌なるもの。雪深き山中におゝく。卵を雪中に藏めて。よく是を生育し。又一種の白雞あり。名けて「スチエウ。フウーン」といふ。雪雞の義その大さ鳩の如く。性又雪をこのむ。まゝ莫斯哥未亜および「エイス。ランド」に白猪白熊を

産し。まゝ卧兒狼徳の海中に一種の稍白色なる鯨を産し。ちきを「ウ井ッテ。ヒッス」白魚と名く。蓋北方の寒地によかく白き生類を生ずるなり。南方黒人國の人ハいふに及ばず。雞にまゝ黒きを相反せり。

印度の異木の説

東方印度の地に一種の異木を産し。其樹枝東にもふそのハ大良藥にして。諸般の病患に用ゐゝ。極めて効あり。西にもふそのハ大毒にして。誤り服せば人を殺し。其理詳にすることを得ずといふ。

鐵島水樹の説

亜弗利加洲（アフリカ）・皮力土尓熟利土（ビレドルゲリット）國の南海中に十餘島あり。總称して「カナアリヤ」といふ。みなふ伊斯把尓亜（イスパニア）國の王に屬し其最西なる一島を「ヘルロ」と名くまる「エイセル。エイランド」と名く。共に鐵島といふる義なり。此島に一種の奇樹を産し和蘭の人呼んで「ワートル。ボオム」といふ。水樹の義 其枝葉垣に清水を滴下し（テキ）若日光を受きて其水滴（シタタ）ること最多し。故に土人これを桶鉢の類を多く樹下に置きて其水を受く。此島中絶えて水泉なしといへども此水を日用に供し少し事を缺くことなしといふ。造化の功妙なるこゝろ故に称して聖水といふ。ときに一千四百零二年日本應永九年。唐土明の建文四年壬午に當る。ふ拂郎察（フランス）國「ノルマンヂー」の人ベテンコウルトといふ者此島にいたり此水の奇狀を見て其著すところの書に記録せり。諸の西書にこの水の事を載るもの甚多し。ドトケウスがいまく是猶我欧羅巴（ヨウロッパ）洲所産の「リンダウー」草日露の義の日中に至ればみな水を滴下して地を濕（ウルホ）すが如きものゝ然れども我いまだ彼島に至りて此奇樹を觀ることを得ず故に此理を詳に窮むることを得ずと記せり。

太懶毒辣（ダランドラー）の説

意太里亜（イタリア）國に屬する那波里（ナポリ）國の内「タレント」の地および

其近傍西齊里亜哥尓西加等の諸島に一種の毒蟲を産し、さまを名けて太懶毒辣といひ、又「ステルリオ子ス」といふ。和蘭の人は呼んで「ドルレス。ピンチコッフ」といふ。狂蜘蛛とすなはち蜘蛛の類なり。人を刺すに螫さるゝ義なり。其毒はなはだ怒り、或笑ふ。故に此症を名けて「ラテン」の語に「タランチスミュス」といひ、和蘭の語に「ダンス。シ井キテ」といふ。「ダンス」は舞蹈なり。「シ井キテ」は病なり。さまを療するは其病人を轎子の中に入れて、四隅に綱をつけて、高き処に懸けて、是を推廻すべし。此の轎子旋轉してやまず。此時はおいて人その傍に在り。其病人の平生好むところの樂を奏すれば、病人すなはち醒て平愈し、然るのち藥をもつて是を治すといふ。

「アダムス。アップル」の説

和蘭語に佛手柑を謂て「シットルウン」といふ。其一種大なるものを「アダムス。アップル」といふ。其状橙橘の類と同じくして、橙子より大なること二三倍、外面に少の斷紋ありて、恰人の歯を咬たる状に同し。是太古の世に世界開闢する時の人の始祖亜當此菓三枚を取り、是を喰ひ噛たりしに、故に名けて「アダムス。アッ

プル」といふ。古の人の子孫なり。上巻に見ゆ。もとよりこの「ヨーデン」の人みな家ごとに毎年此菓一枚を採りて其神に供ふ。故に世に称して「ヨーデン・アップル」といふ。

象并象牙の説

ヒブ子ルスが萬國傳信紀事ふいもく。象ハ西語「オリハント」また「エレハス」といふ。古の四足生類の中に於て最大にして且猛し。又靈慧にして能く人に馴ぢく。其役使するところに從ふ。其天性野猪龍鼠(枕が五雜組に曰象畏鼠)および燕を惡む。(按に謝在)印度(インド)および亜弗利加(アフリカ)洲の人ハ此獸をとりて戰に用ゐ。つねに上に騎ることをなす。此獸二の長牙ありて口よりして外に向ひて出づ。是すなはち世に知られるところの「エルペンベエン」なり。又其鼻甚長し。是を名けて「プロボスシス」といふ。古の鼻をとりて人の手をつかふごとくす。諸般の事に用ふ。此獸多く亜細亜(アジア)洲中に産す。然して殊に多く亜弗利加(アフリカ)洲の亜毘心(アビシニー)域。莫拿(モノ)莫太巴(モノエモギー)等の諸王國の地および則意蘭(ラン)島に産す。(按に輿地圖説に「セイラン」の象ハよく人語を解し重きを荷ふ。遠きに致すといふ。)ほぼ其最大のものハ工鄂(ゴンゴー)國より産す。(此國より出づるところの象其牙二百餘斤の重さあるを上巻に見ゆ。)象ハ其壽よく一百五十歳を保つといふ。

ウヲイツが醫學寶函に曰。象ハ大獸にして東方印度

および黒地（エナオヒア）「アフリカ」洲黒人諸部の總名）諸國の地より産し、人其牙を藥用に供するがゆえに、生藥舗より是を求む。是を名づけて「ラテン」語に「エビュル」という。和蘭語に「エイホール」という。此牙甚大にして、その徑（ワタリ）およびの圍（カコミ）もまた是を称（タチ）ふ。其外面は黄にして、裡面は白し。其獸大小にあらざるべし。此牙の大小輕重あり。故に其重さ五六十「ポンド」より九十六錢なり。詳しくは下巻に見ゆ。）「ポント」は量の名、藥用の「ポント」は一「ポント」の重さにして、或百餘「ポント」にいたる者あり。然して其牙の狀全くなるものを、彼産する地方より我歐羅巴（ヨウロパ）に輸（イタ）し来る者、これを名づけて「エドュルインテグリュム」また「インフラグメンタ」という。醫家は

おのおの屑（スリクズ）となして是を用ゆ。これを「ラテン」語に「ラシュラ。ユホリス」といい、和蘭語に「ゲラスプト。エイホール」という。なまじひに擦象牙（こすりくづる義）これの屑、よく諸種の熱症黄疸（ダン）および脾肝臓の閉塞するに用ゆ。功あり。其外尚これを火に焼く用ゆるものなり。これを名づけて「エビュル。ウストム」という。此品また二種を分つ。其一は火氣を外に洩（キラ）さず、久く焼き白色となすものなり。これを「フポチウム。エキスエボレ」と名づく。其内外面ともに白くして量重く、質柔脆（ジウヤワ）にして、美き鱗節をなす。此物よく閉塞するの功あり。また或これを製して錠となす。ならびに下利諸症に用ゆ。甚妙なり。

まことよく白帶下を治す。其二ハ象牙を壺中に固封して燒くる者にして、其色甚黑く、世に又或象牙に似たるの大牙を土中より掘得ることあり。其物又外面ハ黃にして、裏面ハ白く、是を舌上にあけバ舌に粘著すけだし。この土中より得たるところの象の牙に似たる者ハ、豈象牙の久く土中に埋もれて、土氣薰蒸して、かくの如く軟なるに至るものか。或膏腴なる土氣、自然に凝成して、牙の如くなる形を結ぶものか。いまゞ知るべからゞ窮理の學家にあらゞ。此「エビュル。ホッシレ」即掘出すの象牙といふ義なりを定めゝ。「ウニコール ニュ。ホッシレ」と其功用を同じうすと

いへり。「ウニコール ニュ。ホッシレ」ハ掘出すの一角なりといふことなり。詳に医学室函に見ゆ。蓋此方にいふ龍骨土中より出る者なり。の類ならん。

「オポッシュム」獸并「セミヒュルバ」獸の說

亞墨利加洲加里巴納諸島の地に一種の獸を產ス。名を「オポッシュム」といふ。其大さハ猫のごゝく、喙ハ尖りて下顎ハ上顎よりハ短く、喙の狀ハあたかも豕に類ス。其爪きさめて尖利にして、樹木に爬ひ上ぼること速なること鳥を捕へゝ是を啖ふ。其牝一產大抵六子を生む。其腹に袋あり。伸ぶべく縮むべし。恒にハ其子をその袋中に入れ、乳するときのゝ是を出ぶし、牡なる者ハ腹に袋なくして、

其の牝を追ひけ〳〵。其子を袋中に入れ〳〵行き走る〳〵いふ。
また〳〵亜弗利加洲に一種の獣あり。「セミヒュルパ」と名く。その
の形。狼に異ならず。その牝たるものの肉嚢あり。その胸
に懸る。恒に子を其内に入れ〳〵行走すといふ。さ
の類なり。

亜弗利加の大獣の説

亜弗利加洲「バムボク」國の西方「ガツタ」「ヤカ」等の地に一
種の大獣を産し。名を〳〵「ギアマラ」といふ。其大さ象に
半倍し。其頭頸恰駱駝に似〳〵。背に二の大瘤あり。其足甚
長く。行歩甚高し。頭に七の角あり。各長さ二尺餘。色黑く

して其状牛角に類し。性獷悍なりといへども。人或ときを
畜ひ養ひ狎れしめて。よく重荷を負ひ遠きに致し。たゞ行
歩をなすべき速ならず。是に飼ふの食料や駱駝の食料と
類し。其の肉は黑人の徒すつ〳〵美味とするところのもの
なり。

「アソウハ」獣の説

又亜弗利加洲に異獣あり。名けて「アソウハ」又「シアカリ」と
いふ。此獣つねに人の墳墓をほゞき〳〵。其屍を出だして是を
食ふなり。

大蟹の説

亜墨利加洲・伯西兒國(ブラジリア)に一種の大蟹を産(ム)し・名(ナ)づけ「ギュアッヒニュム」といふ・其螯(ハサミ)を開(ヒラ)くこと・ハ・其大さ人の股(モモ)を開きたる如し・ほ多く塘中(タウチウ)に穴を穿(ウガ)ち居り・時(イツ)として・天(テン)に雷鳴すれバ・則此蟹穴より出づ・人是を見(ミ)ざ・大に號呼して・衆を聚めて是を捕へて・もつて食料(クワリヤウ)とす・其味極めて美なりといふ・

水蛇の説并水蛇石の説

意太里亜(イタリア)「カラブリア」の地の水中に・一種の蛇を産し・名(ナ)づけ「ボア」といふ・其形甚大なり・小犢(コウシ)を見(ミ)ハ・則飛で・ちまきを廻繞(メグリヤウジ)して・その血を吸ふ・人も是に咬(カ)まれハ・其

腫脹(シユチヤウ)甚大なり・むかし羅馬(ローマ)のカラウヂウス帝の世に・ある人(ヒト)ありて・此蛇を撃(ウ)ち殺し・其腹中(フクチウ)をわ(ハ)れ・人乃全身備はる者を得たりといふ・

リュッデマン(ドイツ)が奇方秘苑に曰・水中に生ずる蛇を捕へ・其尾を樹木に縛(シバ)し・其頭を下にして掛けおく時ハ・其蛇早(ハヤ)くハ一時・遅けれバ一二日の間にしてならば・一の石を吐(ハ)き出ぶ・是を水を盆子に盛(モ)り・蛇頭の下におき・其石を盆中に受(ウ)く・尚其水中に漬(ヒタ)して暫時にしてのち・石を取り出ぶして・水腫を病む人の腹上に・むすびつけ・もくと・紀ハ・よく腫氣を除(ノゾ)き去るといふ・(桜ノ太平)

廣記に珮珠を取ることを載せたること似たり。

雞石の説

まゝ奇方秘苑にいへゝ「パー子ン。ステーン」和蘭語パー子ンは雞なり。ステエンは石なり。も生ぜゝ四歳を経る雞の肝中において時として生ずることゝの者にして其大さ豆の如し。質透明なること恰水晶のごとし。是甚貴むべきの物にして戰場に臨む時ものど是を口中に含めば渇することなく且よく敵に勝とふ。リュッデマンうつゝ旅行せし時に途中にて渇に苦みゝに人なりて此石を贈る因て是を舌上にのせゝ試むるに即時に渇止みゝゝ。

先年予が友人うつゝ雞肝中より此石を得ゝ以ゝ予に問ふ予以為ものこと雞の誤りて石を呑みるものならんと後に此書を讀みて始めて此石なることを知る當時ものこを識らずして其功を試みずしてやゝぬることゝ恨むべし惜むべし。

西洋言語の説

萬國傳信紀事に曰欧羅巴洲中諸國其言語の原始およそ三種あり。第一ハ「ラテン」意太里亜の中にあり舊都の名なり。語なるものこを意太里亜拂郎密伊斯把你亜等諸國の言語由て出るこゝろなり。第二ハ入尓馬泥亜語なり。ものこを和蘭語厄利亜。

第那瑪尔加(デーナマルカ)雪際亜(スエレア)等諸國の言語由り〳〵出つるところなり。第三ハ「スラホニア」尔馬泥亜(ニア)國帝畿の州郡(ポロ)なり。語なり。

古里(ミア)悳(オンカリ)厄美亜翁加里亜(ニア)波羅尼亜(ムスコビア)莫斯哥(ムスコビア)未亜等諸國の言語由り〳〵出づるところなり。

按ず海を「ラテン」語〳〵「マレ」といふ。拂郎察(フランス)語〳〵「メル」といふ。伊斯把你亜(スパニア)すなわち「マル」といふ。

書籍を八尔馬泥亜(ニア)ハ「ブック」といひ、和蘭(ホルランド)ハ「ブック」といひ、第那瑪尔加(デーナマルカ)ハ「ボック」といひ、諳厄利亜(アンゲリア)ハ「ボック」といふ。

右の如き小異ありといへども、其原ハみな土地より〳〵一轉音のこるつ〳〵入尔瑪泥亜(セルマニア)第那瑪尔加(デーナマルカ)語を和蘭(ホルランド)の語に参考するに、其語多くハ相似より。諳厄利亜(アンゲリア)の語ハ甚異なりて古き〳〵同からざる多し。諳厄利亜國其歴世の沿革(エンカク)によりて、其語音もまた〳〵變ず。

と、西書に詳なり。古きの事甚少し。考ふるところなり〳〵私録する者なりといへども、尚稿を脱(カウ)するを得ば、他日是を詳にすべし。

すべて文字と言語とに係るものハ皆別記に録す。故に此書ハ古見を要して、其大凡を說めり。

硝子を柔にする法

「シヨメエル」が保家全書ハ曰ク野羊の血を以て硝子を煮るとき其柔なること蠟あるいハ白瑪瑙の如くなるなり。此時ハ人その心の欲するが如くいづれの形にもなり造りてのち是を水中ニ投ずれバ堅きこと初の如しといふ。硝子ハ和蘭語「ガラス」といふ「ラテン」ハ「ヒートロム」といふ。我邦にて「ビードロ」といふ。古の「ラテン」語の轉音なり。又按ニ西洋にて硝子を造ること其原始極めて久しかるべし太古洪水よりも以前の事にして罷鼻尓の高臺を建しとき既ニ多く処ニ硝子を用ゐることなり。

屋室并拐糞の説

歐羅巴洲ハ人家ニ石を以て造建れ故ニ火災絶えて稀なり。其木のみを以て造るものハ下賤の家なり。又彼方厠糞を掃除するハ夜なれバ夜をもつて白晝天日の光ハ決して糞を掃ふことなし。故ニ和蘭語ニ拐糞人を謂て「ナクト・ウエルケル」といふなり。「ナクト」ハ夜なり「ウエルケル」ハ業をなす者といふなり。

西洋瘡の説

和蘭語ニ瘡瘡を呼んて「スパンスポック」といふ。「スパン

ス」を伊斯把你亜國なり。「ポック」をすべて瘡とい
ふ。瘡瘡を「キンデル。ホック」といふなり是をいふ。昔時歐羅巴洲
諸國よハたえて此病なるのやうよ。伊斯把你亜の閣
龍「イタリア」國の人なり。伊斯把你亜王の臣なり。始めて「アメリカ」洲を見出ぶ。其事別巻に詳なり。より
始まるなり。亜墨利加洲を開拓し時よ此の是に相從
ひ亜墨利加よ至りしる軍卒等多く彼地にあり
こ此病を患ひ國よ歸りしより伊斯把你亜の地
ハ此病傳染し夫より他の歐羅巴諸國よ流傳せし故
なりといふ。その傳染の始末西史及び彼邦の医書に詳なり。

西洋産婆の説

和蘭（ホルランド）まさ産婆を謂て「フルウド。フロウー」といふ。「ラテ
ン」語にてハ「オブステチリキス」といふ。此方及び支
那よりハ穏婆とハ甚異なり。その「フルウド。フロウー」
といふ女ハ少き時より終身不犯（ボン）して種子の戒行を
保（タモ）ちて尼のごとくなる者なりといふ。蓋生を重んじ姦
を防（フセ）ぐの意なるべし。

諧談

彼方諧（ゲキ）談の類まさまあり。今其一二條を左に記す。
一處女あり。夫なくして孕（ハラ）めり。ある人ことを詰（ナジ）りて
曰。姐（シヤ）ニ誰（アナゴ）人と私情を通じて然るや。答て曰。つて私情

ものるとなり。曰すでに夫壻(フセイ)なり。まことに私情なくして何と以て孕めるや。處女(ショジョ)のいたく時に「ナクト」「メルレイ」あり。豈ものを感じて然るものならんや。「ナクト」ハ夜なり。「メルレイ」ハ牝馬なり。二言を合して夢魔(ナクマ)いたくさまを「メルレイ」ならんか。「ヘングスト」ハ牡馬なり。ならば「ヘングスト」ならん。

一酒徒(シュト)あり。酒を嗜(タシ)むこの甚だしきよりして其眼を患ふ。醫師カルドウアといふ人ものを戒(イマシ)めて曰。足下の病たること酒のなすところなるもバ宜(ヨロシ)く酒を禁ずべし。酒徒ものたへて曰。我酒を飲めば果(ハタ)して眼を損ず。然ものを酒を飲まざれとれハ寂寞(セキバク)(サビシ)よりたへずして我身を損ず。寧(ムシロ)小なる

窓(マド)をして閉塞(ヘイソク)をしむるも。大なる家を壞損(クイソン)をさらしめんことを欲するのごとし。

藥を服をすべてよく飲食をすゝむる方

奇方秘苑に曰。凡食飲を失ふ者ハ多くハ胃の敗壞(ハイクイ)するよりてなり。然る後よく他の諸病を生ずるに至るものなり。故に治し易(ヤス)からざるの症すべてうくのごとくなるとれハ。居恒(ヨノツネ)膳に就(ツイ)く食するとてはなはだ多くなるべし。たとへ豐饌(ホウセン)美味に對すといへども。又是を厭(イト)ふの意あり。強(シ)ひて食へば。かならず多くハ吐逆(トギヤク)する者あり。予が一親友のごとく一の園圃(エンイウ)を管(カン)する醫官の許(モト)に赴(オモム)きて。奇異

非常の藥草を觀ること甚多し。此時まのあたり常に有るところの草に一種の駄くゝ効ある事を知るべし。ふ。ところ其園の園丁我友人を導きゝ。それ貴重なる苑囿をよく悉觀せしめゝるよりゝく。我友歸るのぞみて。是を謝するに貨をもつゝせしゝバ彼園丁まゝ一箇の秘事。藥を用ゐずしてよく飲食をたゝもるの法を傳へゝり。ところいろんとなるバ此時に我友人數日以前より飲食うつゝすゝまざるの症を得てなやもゝり。此事をうの園丁にかゝるゝに。園丁ゝなるゝち茵蔯草を両手掌に捧げ来りて曰。此葉を莫大小の中。および履の裡足蹠の

下のいたるまで。毎朝其新なる葉をいたゞかゝ。初の葉を除くべし。然らば則能食することを得べし。友人是に從ひゝ。右の如くをしうで果ゝ平癒せり。その後いくばくもなくして。予もまゝ此症を患ひて。諸食物を吐してやすんぜず。温なる食物の香を嗅ぎゝ忽嘔吐を催すにつゝ。偶此事を彼友人に語りゝ。友人の曰。此方信ずるに足らざるゝが如しといへども。我さきに彼園丁より此方を受け用ゐゝるに病いえゝ効を得るとなるバ。すゝむるを用ゐる試ゝらるべしと。いまゝりて予すなゝち茵蔯を採りゝ。其葉を莫大小の中に入る。

毎日葉を換へ〳〵是を試むるに凡二月有餘にして病全く癒え〳〵食するに二人を兼ぬるに〳〵れを便知るに真にたぐひなる経験の良方にして且つ之を行ふに又甚容易に茵蔯草の如きと都鄙を論ぜず處に隨ひ〳〵にな多く得べし然るに別に藥地服そるとあり且諸貴重なる健胃の藥及び拔尓撒摩等の貴品を重價を以て購ひ求むるに及ばず此容易なる方を以て失ひなる食飲を元に復するを豈一奇快にあらずや予すでに之を試みてのち恒に之もて是を以て功を奏するにより一二の親友に此法

を教ふるに皆笑ひて信ぜずといへども試み〳〵後に大に効を得て感謝を受ること多かりしなり

薔薇を以て香竄たらしむる法

同書に曰予ぶ友に一園丁ありかつて把理斯（ハレイス）（拂郎察國の都なり）の地に旅行するにより予に之を贈るに少の旅用の貨を以す園丁ここに是に報ずるに薔薇（シャウビ）を以て太芳香たらしむるの法を傳へたり其法すべ薔薇樹の附近にあるに葱（ソウ）を土中に揷（サシ）入るの〳〵にの薔薇樹株の多少に從ひて葱（ヒトキ）を應〳〵多少にして然る

と紀ハ薔薇ハ非常の芳香ありて其花より採るところの露すこしなれども香竄(サン)ようつ藥用ハ入れて功最大なるを以て製藥家殊ハ好んで是を購(アガナフ)ふなり

卵中ハ文字を書するの法

同書ハ曰ふるき戰爭の時節ハ往々にして遠方へ秘事を告んとするハ其間の道路を敵人阻絶(ソゼツ)して通じがたきの節ハ用ゐるものなり其法没食子と明礬とを酢にて紀〻卵の殼(カラ)上ハ字を書して乾(カワ)かし其後三四日が間ふるき紀酢の中へ投して乾かし遠きハ送る途中にて人ふるを見るとき

あへて知るべからず彼方ハ送り至るハ及びて彼(カレ)その卵の殼を去るバ白上ハ文字ありて事辨ずべし又明礬没食子并びハ酢を以て殼上より書き乾かしてのち其卵を鹽水中ハ投じて煮ること一時(此方の半時)むかうすれバ殼上の字ハ消散して中の白ハ字存するなり

又一方新なる卵を中久しく酢の中ハ投じあげバ殼柔まる此時「ランセット」(小機)を以て長くふるを裁(サイ)て其中ハ小紙牘(トク)を納(イレ)る酢より出ざるあるバ卵ふたび堅(カタ)し卵のきれめをば石灰まるハ蠟を以て塗るべし

ちうを塗りくるるとそこなうたるとバ自見(オノヅカラアラハ)ヒまさず前の法よりちうべ。

石上ニ文字をなす法

同書ニ曰一の石を採りてよく清を洗らゑ蠟を溶して其上ニ字を書し是をつゝき酢ニ投すること十二時(此方の六時)ばかりして石を取出しその上なる蠟をさそぎ落せば字石上ニ存してあへく消えぬとい(溶恐鎔誤其下疑脱數字)

桜ニ草木子ニ云亀尿(デウ)可以和墨寫字入石と貝原大和本草附録ニ此説を載せく日本ニもく昔佛経を石ニ書くニ其文字久く脱(ダツ)せざるハ此法なり

といふ今も其石ありて本朝食鑑ニ亀尿を取る法漆盆上ニ置ちて鏡を以て是を照せば出づ一説ニ蒼耳子(オナモミ)油を以て墨ニまぜり文字を書セバ石中ニ入りて長く脱(ダツ)せず或曰芸香を油墨ニ入れ蛤粉の末をまぜへ石ニ書せば脱せずと云ニ其事稍似るるもあるニ是ニ附記ス

金の量を重くする法

同書ニ曰新なる馬糞を採りて其汁を搾(しぼ)り出しこれニ黄金を投じて後是を出ぜバ則其量よく重くなるなり

猩ニ絨を染める小蟲の説

猩二紙ハ「コシ子ルラ」ト云フ小蟲ヲ以テ色其血ヲ以テ
染め成すところのものなり。今西書所載の説を採り。
左ニ飜譯して考證ニ具フ。
ウヲイツヲ醫學實函ニ曰「ラテン」語「コシ子ルラ」まゝ
「コシニルラ」ト云ヒ。和蘭ニ古ヘト「コセニエリ井ン」ト云
フ。其形小ニして偏平。一片三角。なるひハ四角ニ分ヒてる
顆粒ヒとなる。外面ハ銀色ニして。裡面ハ赤ー。伊斯把你
亜國の人多ク西方亜墨利加洲より得来る。其物多ク
無花菓樹ニ附ク。孛露國（亜墨利加の中ニ在る大國ニして伊斯把你亜國ニ屬ス）の人
心を用ゐて之を採取ス。まゝ諳厄利亜國の人テイソン

がいまゝ「コシ子ルラ」ハ即小蟲の一種ニして。無花果樹
の葉ニ附て生ズ。今生藥舗中ニ之を分けて四種と
なる。其第一ハ。拂郎察國の人呼びて「ラゴセニルレ。ステ
クエ」ト云フ。是すなはち我華恒ニ多く見るところの者
なり。第二ハ「コシオ子ルラ。カムペシカナ」と名く。上ニい
ふ第一種のものニ比ヘバ。粒ニ聚りて塊をなし。色
ハ他品ヨリ最赤くして。且不潔のもの多く其中ニ
雜まれり。第三ハ「コシラ子ルラ。テトレカッラ」と名
く。之ハ平地ニ産する者ニして「カムペシカナ」（未詳。再按ニ「カムペシカナ」ハ樹の名なり。多く北「アメリカ」の地ニ産ス。もつて染料となる。の下ニあらて是を得るな

り。第四ハ「ウ井ルデ。コシシ子ルラ」と名く。是ハ大葉の地榆（ゲニ）木（ワレモカウ）の根の下ニあいて。たまを得るなり。凡右の四種ニて第一種の者を以て。上好の品となし。藥局（ヨロヒ）の中。たまを以て「アクッア。ヒッタ」（藥水の名）を製し。或胃の病ニ用ふるの藥水ニ色を注けく。赤うくめ。又小水を通ずる良藥とし。染匠専是を用ゐる。種ニの段疋の類を染むることをなしたり。

ヒブ子ルスが萬國傳信紀事ニ曰「コセニルレ」又「コシ子ルラ」まゝ「コシニルラ」と名く。其色赤くして美麗なり。是ハ即一種の小蟲の乾きて化生するものにて。その形「ウエエグ。ロイス」（木虱の類）ニ似たり。たまを壓（オ）しくだり出だ

しの液汁（エキ）ハ。染匠以て色を染むとなるのそのなり。此物多く亜墨利加（アメリカ）洲中ニ産し。すなわち無花果樹ニ似る一種の樹上ニ附生し。亜墨利加（アメリカ）の土人。哆囉絨（ラシャ）を以て其樹下ニ布（シ）いて。のちニ其小蟲をさらげ落せバ。則此蟲よく速ニ死すゝいふ。されども世ニ名ありて。人の貴重するとなるの「コセニルレ」さまになり。然（シカ）ども此物特ニ亜墨利加（アメリカ）の地のみ産するゆえ。ならびにうんとなるまバ。入尔瑪尼（マニア）亜國中「ポレイゴニュム」の地「シント。ヤン」といへる所の邊の樹下ニおいて。一種の赤くして大さ穀粒の如くなるの找産し。世ニ是を名くゝ「ヨハンニス。フルウド」という。

是を以て人を誑(アザム)して、真正の「コシニ子ラ」なりと称し、
て貿易(バウエキ)に、此赤紅粒の如くなるものハ、まゝ他物にあらず、
ちつき一種の蟲の卵なり(ウリカヒ)。ちつきを暖處に置きて、日光を
受けしむるバ、則よゝ生育して蟲となる。此蟲血の如く
なる赤紅液汁あり。ちつきを以て絹帛羊絨(ジウ)等を染
む。まゝ都児(ル)格國および亜尓黙(アルメニア)尼亜國の人ハ「ホールセ
ヨーデン」の地より、てゝ多く「コツキュス」(一名「カルミン」ともいい本書を校ずまさ)ふ
「コシニ子ルラ」に似たる一種の蟲なり。を購(アガナ)ひ得て、以て哆羅(ラシヤ)絨絹布皮革等を
染む。是を名付て「サツヒアン」といふ。まゝちつきをもつて
馬の鬣(タテガミ)および尾をも染むるなり。藥局の中にちつきの「コツ

キュス」の汁を搾(シボ)り出だして、以て「ケルメス」汁に代用
う。「ケルメス」はまゝ「アルケルメス」まゝ「カルモゼイン」ともいふ。櫛(クシ)に似たる樹なり。其實ハ藥に入る。その功能ほぼそのなり。その後
メシュアといふ人撰するところの書をみるに、また「コツ
キュス」を「アルケルメス」(上の「ケルメス」はおなじ)の製法の如くにちつきを
其功少うしといへり。我輩古時拂郎察國(フランス)より出づ
ところの汁を見るに、全く「コツキュス」の汁にして、「モント
ペルリール」の地(拂郎察國の縣邑)において此蟲をもつて製する
ものなり。藥用に供じて、其功入尓瑪尼亜國(ルマニア)より出づ
者と異ることなし。ならびに元氣を補助するの良藥なり。
まゝ此「コツキュス」の汁に、新なる佛手柑汁を加へ製し

て其氣を引いふ。古色を紙に漬して顔料となす。古色を「カルタ。ヂ。スパグナ」と名く。まゝ是類に「ベゼッタ。リュブラ」「ラテン」語「リュブラ」ハ赤なり。一名「ブランケット。ヴック」と名くる者なり。和蘭語「ブランケット」ハ顔料なる「ヴック」ハ布巾の類なり。はゞ此汁に漬して製するところのものなりといふ。

まゝボイスが學藝全書を按に「コシ子ルラ」蟲其形半圓なるゆゑ〳〵くゝして其種類すゝ多し。第一種ハ赤翅の上にたゞ二の黑點あり。第二種ハ赤翅の上に長く白き筋及び斑點(ハン)あり。第三種も赤翅の上に七の黑き斑點あり。此種ハ諳厄利亜(アンゲリア)國中に甚多し。名けて「ユッフロー。クウ」といふ。第四種ハ翅黃に第五種ハ翅黑し。たゞこれ皆翅の色及び斑點(ハン)にて類を分つものなりといふ。其書唯翅のことを載せ他事を畧ぬ故に附するのみ

「ゴウデ。ヒウス」の説

「ゴウデ。ヒウス」和蘭語「ゴウデ」ハ金「ヒウス」ハ魚なり。湯水の中に小生じて形狀美麗なり。其背金色にして腹ハ銀色に両傍ハ赤色なり。黑き斑點皮上に散在し尾も幅廣くして金黃色に其肉ハ柔にして味美なりといふ。此方にいふところの金魚と稍相似たりといふべし。則意蘭(セイラン)島の異草の説

則意蘭島（東印度の大島なり）の内、崑崙勃（和蘭より鎮守を置きて治むるの地）の府城の近邊
に一種の大なる異草を産ぶ。是を「プラタ。ヂスルヲトリア。
ミラビリス」と名く（是水を搾りいだす奇異なる草と云義なり）此草陰濕の地に生ぶ。其
葉の傍より多く水を滴下して自凝りて桶の如きものを成
して曲りて下に向ふ。其形角に似たり。其質ハ木皮に似て色
黯黑色なり。和蘭の人又名けて「ドイフルス。ボーム」といふ（ドイフル
スハ鬼神なり。ボームハ樹なり。是此桶の如きもの未熟さるの間も
其奇異なるによりて名くるなり）
上に蓋ありて是を塞ぐ。熟するに及びて八人指を以て其上を
壓して口を開くに甚容易なり。其桶の如きものの中ハ皆水
なり。便就て是を飲む。其水極めて清冷甘美にして能く心を
強くするの良藥なり。

工鄂國の奇鳥の説

亜弗利加洲工鄂國に一種の異鳥を産ぶ。名けて「エンチーンヂ
ー」と云。其皮甚美にして。すべて斑點あり。此鳥恒に空中に飛
翔して。敢地に下らず。唯時ありて高樹の上に止まるのみ。若誤り
て地に下きバ。忽に死ハ。故に其地に於て。是を得ると極めて
稀にして。其價甚貴重なり。王侯貴人のみ是を得て服とな
す。其以下ハ敢用ゐること能ハざるなり。

西洋雜記巻四終

山村才輔著

嘉永元年戊申三月刻成

江戸書林　鈴木文苑閣　日本橋北十軒店　播磨屋勝五郎藏板